

## 祭祀の医療思想

宗 田 一

わが国古代における氏族制度では、道徳も個人道徳でなく氏族の道徳であり、神は当然のことながら氏族を守る神<sup>ニ</sup>氏神であった。神は人間にのりうつて神意を啓示する。この神の意思を知り得たのは特定の人<sup>ニ</sup>氏上であり、神と人とを媒介する司祭者であった。

神意をおかす行為が罪で、罪は神の忌み嫌う行爲ないし事実と考えられ、罪の根底には「いみ」（忌）の思想があり、その罪には次の二種があった。

。国津罪：人間の共同生活にとって忌むべき行爲<sup>ニ</sup>けがれ、であり、白人や胡久美のようなものも含まれる、「たたり」の概念である。

。天津罪：農耕生活を妨害・破壊するもの（人為・天災）で、「わざわい」である。これら罪に対応するものは刑罰でなく、罪によって起された神の怒りをなだめる行爲であり、それは祓<sup>はらい</sup>と禊<sup>みそぎ</sup>であった。

祓の祝詞は、一種の言語魔術の美によって神々をなだめ、罪を吹き掃い、雲散霧消させようと努めるものだった。

掃うことにより、川・海へ罪を神々の力で流す。海水の流れこみのところに住む女神（ハヤアキツヒメ）が罪を勢よく呑みこむ。息を吹くと次の神（カフキドヌシ）が地下へ息吹き放す。地下にはハヤサスラヒの神がいて、それらの罪を受けと

り、さすらい失う。そして卜部うらふべが祓物を川にもって行って流す。これが行事である。

このように、祓の行事は罪そのものをなだめて、自然の中へ安らかに解消しようとするもので、過去のことや罪・過失を「水に流す」とするのは、その思想である。

禊の行事は、不浄を洗い流すそれで、東南アジアの民族にも多くみられる習俗である。神が清浄を好み、穢れを嫌うとする思想からきている精神的・肉体的な衛生観である。

\*

こうして、古代社会にあつては、その共同体内部を脅かす罪・穢れを外界に追出すための禊祓にはじまって、やがて外界から侵入する疫（病）神を慰撫し和め鎮めて内部への侵入を防ごうとする形に展開する。

律令制下の神祇令に規定する道饗祭みちあはれまつりは、疫神が都に侵入しないよう、都の四隅の路上で疫神に供物を饗応し慰撫する防疫行事で、六月と十二月晦日に行われる鎮火祭ちんかまつりと同じ日の陰陽道の祭祀である。これは四境祭ともいわれ、四角祭なる鎮火祭とともに四角四境祭ともいわれた。また、疫病の流行のたび臨時に行う疫神祭も同考のものだった。陰陽道の盛行につれて平安中期以降に造営される「大將軍」神社が方角の神であるとともに疫病除けの神となるのは、その位置がおむね道饗祭の行われた祭場を神祠にしたためと思われる。

悪鬼に饗応して災をさげようとする思想は仏教にもみられる。世俗にいう施餓鬼がそれで、餓鬼を供養すれば災害のがれ延命長生するとする。疫神慰撫の思想もこれらと共通の思想がある。

これら祭には、供物として魚類のほか、牛皮・鹿皮・猪皮・熊皮がみられるのは、中国における旁磔はつたに通ずる。神に供えるいけにえを四方の門にはりつけ邪気を払うものだったが、中国ではのちに動物のいけにえに代えて土でつくった土牛を使うことがみえ、逐疫ともいわれた。わが国にもこの土牛の習俗が伝わっていて、『延喜式』（陰陽寮）に、土牛と童子の像を大寒の前後から立春の前夜まで諸門に立てると規定されている。

\*

さらに、『延喜式』には、養老令にない祭祀として、遷たたりがみ却をうしはら嶽まつり神祭かみまつりが追加されている。これはそのときの祝詞からみて、諸神を祀つてその威力で疫神を払うものだった。もっとも道饗祭でも祝詞では疫神のものではなく、それを防遏する八衢やまたひこ比古・八衢やまたひめ比売・久那斗神を祀るとしているの、これなら疫神の侵入を防ぐための、いわゆる塞神さいのかみである。

塞神は、人間界と幽冥界の境をつかさどる神で、外から襲いくる疫神などを、村境や峠・辻・橋のたもとで防ぐ、防障・防塞の神である。のち、行路神や旅の神である道祖の信仰が習合され、道祖神・道陸神どうりくと同一視されるようになり、仏教の影響で六道輪廻の思想から、六道の辻の信仰となつて、六観音や六地藏と塞神を本地垂迹説でとかれるようになった。

\*

平安時代に盛んになつた御霊ごりよう信仰は、疫病を怨霊の祟りとする怨霊思想によるもので、御霊会ごりようえの祭祀は平安京という都市社会が生んだ特異なものであつた。

平安の都に疫病が大流行すると、それを悪霊のなす業とした。とくに、長岡京の建設を放棄して平安遷都を行った背景には、皇族政治から官僚政治への一大転換に当たつての政争で、非業の死をとげた犠牲者があつた。これら浮ばれぬ怨霊が平安京の人びとを疫病で悩ませるのだと信じられた。こうして怨霊を「御霊」と畏敬してそれを慰め鎮めるための祭祀が民間に自然発生的におこり、それが官祭の御霊会となつて、ますますさかんになった。

そのような風潮の中で、播磨方面の陰陽師が、外来の異神・牛頭天王信仰を平安京に将来した。こうして祇園社感神院を中心とする祇園御霊会が生まれ、慰撫・鎮撫の御霊会の性格を、牛頭天王に代表される靈威による疫病調伏追放へと変える。

祇園祭の山鉾にみられる剣鉾は、御霊系神社に共通する疫病鎮霊の呪具であり、祭神の牛頭天王はのちには神道と習合

してスサノオノミコトの垂迹とされ、その靈威は疫病退散の最大のものとなった。既述の大將軍も、神道と習合してスサノオノミコトに、また仏教と習合して牛頭天王になったのも、この風潮の一環であった。

\*

農村の祭祀から転化したものに鎮花祭がある。元来は農耕儀礼の稲作豊稔祈念から発生したと考えられる鎮花祭は稲花を予祝するものであったが、桜花飛散のころは疫病の精霊が花卉にのって飛散り疫病を流行させるとして、疫病退散の祭祀となった。

京都・紫野の今宮神社の「やすらい祭」はこの系統のものである。

\*

官祭としての防疫行事は、既述のように六月と十二月に行うのを定例としていたが、六月の行事が疫病流行期に重なるために続いたのに対し、十二月のそれはいつしかすたれた。しかし、大祓の儀式が十二月に宮中で行われなくなった応仁の乱後も、民間の社寺では、六月の六月祓・夏越（名越）の祓として行われ、今に続いている。